

－ 問題提起・進駐軍の羈縻支配は朱鳥元年まで続いた －

新庄宗昭（奈良大卒）

◆はじめに／『天智朝と東アジア』完（図1）

天智十年（671）、天智が崩御する。激動の1年（壬申の乱）が始まる。ここで中村修也の『天智朝と東アジア』は終わる。中村修也は最後に、壬申の乱の直前、進駐軍に関わる不思議な文章を挟む。

天武元年（672）三月十八日条には、郭務棕がまだ日本に滞在しており、天智の喪に服して拳哀した記事があり、夏五月三十日に帰国したとする。翌六月からは壬申の乱が始まるから、唐の使者にはそれ以前に帰国してもらわなければならなかったであろう（注1）

この文意を忖度すれば、「郭務棕さん、これから予定があつて、ちょっとややこしいことが内輪で始まるんですよ。見て面白いものでもありませんし、危ないですから、お帰りいただけるとありがたいのですが。はい、お土産！」と（注2）。つまり、「丁重に帰ってもらった」とする。中村修也は、ここで同時に羈縻支配も終わったと理解している。しかし、事変の勃発直前、そんなに都合よく戦勝国の戦利品である羈縻支配を中断し、全土に配置された二千人から四千人の大部隊（武官・文官・技官）を、即座に筑紫に集合させて、さっさと帰るものだろうか。

羈縻支配とは国と国との関係であり（注3）、天智崩御が直接には羈縻支配の終焉を意味しないのではなかろうか。簡単に「帰ってもらえる」ような関係ではないと思うのだが。進駐軍は天智崩御後、そのまま駐留した可能性はないのか、疑ってみる必要がある。そういう眼でよくよく『書紀』を俯瞰してみると、天智崩御後の『書紀』が示すいろいろな事象からは、「進駐軍は帰ってないんじゃないの?」、「羈縻支配は続いたんじゃないの?」という疑いが色濃く浮き出てくるのである。

◆政治の舞台／倭京・浄御原宮（注4）（図2）

羈縻支配の時代の政治の舞台は倭国が大和に造営した都「倭京」でありその宮殿「浄御原宮」である。つまり、唐進駐軍は九州に上陸し、筑紫都督府を置き、さらに東に瀬戸内海を進軍して宇治に上陸し（注5）大和に入り、天智を近江に追い出して、倭京・浄御原宮を接收し、ここに大和都督指揮下の進駐軍司令部・大和都督府を置いた。（注6）

◆天武朝期における進駐軍の痕跡

さて、天武朝期を通じて進駐軍の羈縻支配が続いていたとすると、それは『書紀』の記事にどのような形で表れているだろうか。以下、それを暗示するような幾例かを示し問題提起としたい。

①天智の廟地が進駐軍大和駐留を暗示する（図3）

天智の廟地は京都・山科の御廟野古墳である（注7）。天智が崩御した時、陵墓は大和に造られなかった。母親も弟も娘も皆大和に葬られるが（注8）、天智だけが故郷は大和であるにもかかわらず葬地が大和ではない。この事実は天智が崩御したとき、大和が進駐軍に接收されていたことを暗示する。故郷での葬送は拒否されたと考えられる。進駐軍は大和の百姓の怒りの象徴になることを恐れたのかもしれない（注9）

この位置が問題である。御廟野古墳の墳頂を通る子午線を真南に延長すると、南50km先で大和三山の中央、耳成山山頂東側に当たる（注10）。「大和望郷」もここまでの高精度になると、大和に埋葬叶わなかった怨念のようなものを感じる。この時、天智を送った大海人皇子も大友皇子も大和接收の無念さ、羈縻支配の無念さを思っていたのではないか（注11）。壬申の乱勃発直前のことである。

②進駐軍駐留を暗示する唐軍事顧問団の存在（図4）

『積日本紀』の「私記」に不思議な記事が記録されている（注12）。大海人の軍に複数の唐人が従っている。唐の軍事顧問団と考えて良い。これは壬申の乱の時、進駐軍が未だ我が国に駐留していたことを端的に物語る一次史料の痕跡と言えようか。

③天武反乱軍が勝利したことを疑わせる天武の行動（図5）

『書紀』天武紀上は天武が帰還する記事を何の感慨もなく無機質に記す（注13）。勝った！のであるから、強大な武力・権力を示すためにも正統王朝の都・近江京にまずは凱旋して歓呼の声の中、百姓を慰撫し、大津宮に入場すれば良い。ここに新しい天武王朝を樹てればよい。しかし、一月半も不破行宮を動かさず（注14）、近江京に立ち寄ろうともしない。自らもそこで大皇弟として数年間、治世を担った都だ。立ち寄りもせずに、黙ってすごすごと来た道を飛鳥に帰還している。何の感慨もない。天武が反乱軍を率いて勝利したことを疑わせるに足る不自然な行動である。

さらに、「詣于倭京」が示す通り、倭京に立ち寄って帰還の挨拶だけはしているが（注15）、そのまま自邸嶋宮に帰り汗を流し、岡本宮（注16）でモタモタと3ヶ月もの間、倭京・浄御原宮に入らない。つまり、浄御原宮は己の宮殿ではないということであり、天智朝以降、進駐軍に接收されたままであることを暗示している。

④「壬申の功臣記事」が暗示する天武の立ち位置（図6）

『書紀』天武紀下には「壬申の功臣記事」という記事がある。巻全体にわたって間欠的に二十二名の壬申の功臣の死没日付と個人名を挙げて、死後の贈位記事を載せるのである。まるで巻29の通奏低音である（注17）。しかし、生前であれば、冠位に準じた官職に着ける可能性はあるが、死後の恩勅など功臣本人には関係がなく無益である。何故、『書紀』には勝利

の後直ぐに具体的な褒賞記事がないのか？ それは賜与しなかったのではなく、天武がその立場になかった、つまり、褒賞を与えることのできる最高司令官ではなかったことを暗示する。天武朝期を通じてこの立場が変わらなかったのではなかろうか。臣下もそのことを理解していたということであろう。(注 18)。

⑤進駐軍の駐留継続を暗示する「新城」建設中止(図7)

天武五(676)年は歳条である(注 19)。天武五年、何故、中止してしまったか。ナンバーワンであれば、堂々と継続して建設すれば良い。そしてさっさと遷都すればよい(注 20)。中止した事実は、進駐軍が居座ることが決定的になったことを暗示しているようである。「なんだ・・・帰らないのか・・・」。縄張りを始めた当時は新羅文武王が唐に反旗を翻し、進駐軍が退去する期待は大きかったのではないか。しかし、天武四年、文武王が長安に謝罪使を送る(注 21)。このことが天武に断念を強いたのであろうか。

⑥「飛鳥+浄御原宮」命名が暗示する進駐軍の存在

天武即位元年、即位と同時に宮殿の名称を堂々と「飛鳥浄御原宮」と宣言すればよい。なぜ、即位してから崩御まで十三年、名前を伏せ続けたか。これは、崩御直前まで他所様の宮殿であったことを暗示する。倭京・浄御原宮は倭王が造営した宮殿であり、これを接收した進駐軍司令官・大和都督の宮殿であった。天武朝期を通じて、天武はこの宮殿内に間借りしていたということであろう。

⑦「浄御原律令」が暗示する羈縻支配の継続

天武律令は無い。天武朝期は進駐軍が指導した近江令をそのまま引き継いでいるように見える。天武晩年、新たな律令が制作開始される(注 22)。いわゆる界限で言う「浄御原律令」である。持統朝で完成しているようであるが、公布された記事はない(注 23)。天皇王権は後日(注 24)、この律令について「大宝律令は浄御原朝廷准正である」と言い、大宝律令が他所様、即ち「浄御原朝廷」の作った法律を下敷きにしたことを明らかにしている。「浄御原朝廷」の内実が天武王朝ではなく、進駐軍大和都督指揮下の羈縻政府であったことを暗示している。「浄御原律令」は元来、進駐軍による羈縻支配の継続を踏まえた中期的な政策の柱ではなかったろうか。

—

以上、羈縻支配が天武朝期にも続いていたことを暗示する記事を7点ほど挙げてきた。特に、

- ・最高司令官が凱旋しない
- ・最高司令官が恩賞を賜与しない
- ・最高司令官が新城建設を中止する

・最高司令官が自前の宮殿をもたない

などは、天武が反乱軍の最高司令官ではなかったことを強く示唆する。天武はナンバーワンではなかった。それは天武の能力如何ではなく、唐進駐軍の羈縻支配が天智朝以来、天武朝まで継続していたからではないか、というのが筆者の見立てである（注25）。

◆羈縻支配下の壬申の乱

では「天武が勝ったのではない！」とすれば、壬申の乱はどうなるだろうか。改めて、壬申の乱を振り返ってみたい。それはおよそ斯界の通説とはかけ離れた構造の物語になる。つまり、進駐軍・大和都督が我が国を羈縻支配する中で勃発した事変ということである。

①大和都督の立ち位置

大海人皇子と大友皇子が対峙した時、大和都督は行司役であったわけではない。近江朝廷は羈縻支配下の政府機関であり、大友皇子はそれを統括している。大海人皇子が大友皇子に反旗を翻すことは背後の進駐軍に刃向かうことに等しい。だから、大海人皇子が決起すれば、直ちに大和都督は進駐軍を督励し、近江朝廷軍と共に、即、大海人皇子を討伐したでだろう。しかし、事實は、大海人皇子は壬申の乱を生き延び、天皇王権を引き継いでいる。従って、『壬申紀』が言う「大海人反乱物語」は成立する余地がない。大海人皇子は反乱軍ではない。筆者の見立てが間違っているか、『壬申紀』が作文しているか？

②誰が反乱をおこしたのか？

犠牲になっているのはほとんど大友皇子一人であるから、反乱の主体は大友皇子以外には無い。さらに、大友皇子が「反乱」する相手は唐進駐軍以外には無い。反乱とは弱者が強者に齒向かうものだからだ。

③誰が反乱を鎮圧したのか？

大和都督麾下の進駐軍以外には無い。大海人皇子は総司令官ではない。大海人皇子は鎮圧軍の一翼に組み込まれていたと考えられる。

④近江朝廷は大友皇子と一体で戦ったのか？

近江朝廷の官僚群・皇親・畿内畿外の豪族のほとんどが大友皇子から離反していることから、近江朝廷として一体として乱に加担したのではなく、そのわずか一部が大友皇子に同意して決起したと考えられる。いわば私軍である。

⑤大友皇子反乱の動因は何か？

少なくとも、界限でいう「皇位継承問題」ではない。なぜなら、大友皇子はそもそも皇位を継承しているのだから。強いて小説的に想像すれば、新羅文武王と呼応した「進駐軍羈縻

支配からの解放」ではなかろうか。青年らしい正義感に満ちた君主像をイメージさせる。しかし、近江朝廷内を一本にまとめることに失敗し「青年将校の反乱・六二二事件」になってしまったのかもしれない（注26）。

⑥大海人皇子の立ち位置

大友皇子が進駐軍に反旗を翻した時、大和都督は大海人皇子が大友皇子に加担することを恐れたのではないか（注27）。進駐軍司令部は天武を戦線の主線（近江京—宇治—倭京）上ではなく、東部戦線に回している。それは、『積日本紀』が引用する「唐人条」が示すように、天武には進駐軍の監視団（注28）が付けられていると考えて良い。大友皇子反乱軍は主線上で進駐軍本隊によって鎮圧され、大海人皇子はほとんど何をするともなく（注29）、東部戦線から帰還する。天武は僥倖とも言える後継者となって即位できたのであろう。（注30）古代史の限界で人口に膾炙している「天武篡奪王権論・天武絶対王権論」つまり「天武は強かった」という通説は、「天武反乱軍が勝った！」という壬申の乱の誤解に基づくのではなかろうか。

◆羈縻支配の終焉から日本国へ（図8）

朱鳥元（686）年、羈縻支配は政治的に何事かがあって公式に終わった。その事変が何か。大和都督（倭王都督）の崩御か、唐・武則天からの撤退命令か。二千～四千人の進駐軍はどうなったのか。霧の中である。（注31）

ただ、『書紀』によれば、天武期後半からは浄御原宮・大極殿での儀礼が天武主催で行われるなど、徐々に天武の主体的な国政参加が増加し（注32）、朱鳥元年には「飛鳥浄御原宮」命名（注33）に見るように天武は浄御原宮を自前の宮殿として自立し、大和都督指揮下の羈縻支配から解放されていると判断される。

さらに倭国年号である朱鳥年号はこの先、朱鳥二年、三年と続く（注34）にも拘らず、『書紀』は朱鳥元年しか採用せず、朱鳥二年以降は持統即位年で表記している。つまり、大化元年以来、四十年余りの倭国とのしがらみ（邂逅）からも朱鳥元年には縁を切ったと判断される。時代の画期とする所以である。

天武は飛鳥浄御原宮のナンバーワン・国土統治権者となった。とその時、天武の寿命は尽きた。志半ばであったろう……。その後、天皇王権を覆すような勢力はなかった（注35）。倭国は既に燃え尽きていたのではないか。持統・天皇王権は評から郡への制度変更など粛々と全国統治の体制を整えていった。とりあえず建国儀式の仮宮殿・藤原宮も概成し（図10）（注36）、体制が整って文武に譲位し、大宝元年、律令を整え、建国の日を迎えるのである。

そして大宝二年、武則天に日本国の認証を求めた（注37）。中国の冊封下に入った天皇王権は、後顧の憂いなく念願であった「天武の新城・平城京」建設を推し進め、和銅三年（710）、平城京に遷都した。日本国・天皇王権の夜明けである。

◆補論として／倭国はどうなったのか？

中村修也に始まる戦争観を筆者なりに敷衍・拡張すると、これまでの7世紀後半の歴史記述は大幅に変更されることになってしまう。国土統治権の交代は単なる倭国から日本国へ、ではなく、倭国から進駐軍へ、そして、進駐軍から日本国へと交代してゆくのだ。多元史観でいう「禪譲か放伐か」と言う次元ではない。歴史を組み立て直す必要がある。

だから、だから中村修也が言う通り、進駐軍には壬申の乱の前にみんな帰ってもらった方がいいのだ……。これで古代史の界限は、波風立たず、みんな丸く収まる……。 (注38)。

一方、倭国はどうなったのか？ わからない。倭国は白村江の敗戦の後、倭王は唐に捕囚の身であり、国土統治機構はほとんど壊滅状態に陥ったのではなかろうか (注39) 『新唐書』にあるように消えてなくなっている。進駐軍が大和へ入った時、大和などに残っていた倭国の留守部隊や官僚群は、東へ逃げている、ネズミだ (注40)。一部、留守司高坂王など大和都督の下に大和に残った人たちもいた (注41)。羈縻支配を肯じ得なかった人々のほとんどは、東国科野・安曇野に集団で移住したのではないか。科野はその後、放伐もなく穏やかである。

倭国は日本国から見れば、祖先を同じくする本家筋にあたる (注42)。『書紀』はネズミと揶揄するが、現実には、列島の東西にわたり、時代を通じて人の往来や婚姻・共生などがあったのではないか。倭国から日本国への交代が放伐もなくうやむやに見える理由の一つは、この本家筋と分家筋という関係、本格的に「放伐する／される」という関係ではなく、会話が通じるような柔らかな関係にあったからではなかろうか。

完

【注】

注1 中村修也『天智朝と東アジア』NHK出版2015 241頁、下線は筆者。

注2 『書紀』天武紀上 夏5月条 「夏五月辛卯朔壬寅、以甲冑弓矢賜郭務儂等。是日賜郭務儂等物、総合繩一千六百七十三匹・布二千八百五十二端・綿六百六十六斤」とある。郭務儂等は膨大な土産を持って帰っている

注3 唐帝国の羈縻支配とは、進駐軍司令官・都督が首都等を接收し、①武装解除して軍事権を掌握し、②天子の下の世界秩序という大義名分に基づいて法整備と指令を発し、③在地の首長に②を踏まえた人民支配を委ねるといふ枠組みの統治方式である。近江令や庚午年籍、御史大夫などの官制は天智がこれを使役されて実行していると考えられる。

注4 拙稿「藤原京と飛鳥浄御原宮の遺構解釈」八王子セミナー2023/11 予稿集。なお、浄御原宮が倭京の何処に位置したかはわからない。誰も探したことはない。

注5 『書紀』天智四年十月条 「冬十月己亥朔己酉、大闔于菟道」とある。唐は朝散大夫沂州司馬上柱國劉德高等二百五十四名をこの七月から九月にかけて筑紫に派遣。その後、彼らは宇治で上陸し、閲兵式をあげ入京したのではないか。

注6 大和に進駐軍が入ってきたことを『書紀』は完全に無視しているから、「大和都督府」が『書紀』に記されるわけではない。しかし、半島の都督府複数設置の事実からすれば、名称は別として間違いなく「大和都督府」は存在したと考えられる。では、『書紀』に「筑紫都督府」のみが記載されたのはなぜか？ 筑紫はネズミの国つまり倭国のことであるから、接收されても構わなかった、という感覚が『書紀』編者にあったのではなかろうか。『書紀』が敢えて削除しなかったと考える。

- 注7 御廟野古墳（八角墳）京都市山科区御陵上御廟野町
- 注8 齊明廟／奈良県高市郡高取町大字車木／越智崗上陵。 天武・持統合葬廟／奈良県高市郡明日香村／檜隈大内陵・野口王墓。孝徳廟／大阪府南河内郡太子町大字山田／大阪磯長陵（叔父・孝徳は大和には絶対に帰らないと言い張ったが、甥御たちはそれならばと、大阪・河内に陵を設けて丁寧に葬送した）
- 注9 『書紀』天智紀六年三月条「三月辛酉朔己卯、遷都于近江。是時、天下百姓不願遷都、諷諫者多、童謠亦衆、日々夜々失火處多」とあり、遷都の時に百姓が抵抗したとする。
- 注10 御廟野古墳の墳頂は、東経 135°48'25"。耳成山山頂は東経 135°48'19"。耳成山の東側は香具山・中ッ道であり、その南には飛鳥寺西の槻の広場がある。狙い澄ましたような精度の高さは、大和南部を子午線上に臨む場所を近江京の近辺で探したであろうことを強く示唆する。
- 注11 もちろん、天智は在世中、羈縻支配を肯じて受け入れたとは思えない。むしろ、羈縻支配からの解放は天智の夢であった可能性もある。このことは万葉集巻二・148番歌「青旗の 木幡の上を通うとは 目には見れども 直に逢わぬかも」にも言えるかもしれない。上野誠『万葉挽歌のこころ』（2012 角川選書）によれば、天智重篤な時、太后倭姫がこの子午線上の中間、宇治橋の近く木幡の上を行き来する天智の魂を見て謳ったとされる。天智の魂は大和飛鳥を遠く見てこれ以上、南には入れなかったであろう。ここまででしか帰れない虚しさが表現されているのかもしれない。
- 注12 早川万年『壬申の乱を読み解く』 吉川弘文館 2009 152 頁
- 注13 『書紀』天武紀上 元年九月条
- 注14 拙著『実在した倭京・藤原京先行条坊の研究』終章 275 頁。ここでは「乱勝利から帰還まで一月半、不破行宮を動かさない。何かを待っているようだ。その前後の記事からすると、大和都督は壬申乱の後交代し、筑紫に帰ってきた倭王を都督に任じて倭京に戻した可能性がある。一月半の期間は、都督倭王の倭京帰還に合わせたのではないか」としている。
- 注15 前掲書『実在した倭京・藤原京先行条坊の研究』207 頁 「詣」の字義＝貴人のもとに参上すること
- 注16 齊明天皇の宮処。齊明天皇は難波宮から倭京に移ってくる時、以前の自邸岡本宮ではなく行宮に入る。倭京が造営途上であり、元の岡本宮も含めて、倭京条坊区画の整理によって、舒明朝の岡本宮とは位置も殿舎も変更になっている可能性がある。「後飛鳥岡本宮」という名称はこれを暗示する。
- 注17 直木孝次郎『壬申乱』塙書房 1961 207 頁以下に一覧表で整理されている。参照した。
- 注18 天武は、無理やり部下を叱咤督励して出陣させた。己のやれる範囲で精一杯、功臣の面倒を見たのであろう。後々まで後継者が面倒を見ているということは遺言であったかもしれない、「すまなかった」と。
- 注19 天武紀下 五年是歳条に「是年、將都新城。而限内田園者、不問公私、皆不耕悉荒。然遂不都矣。」とある。「縄張り」は通常は工事の始まりを意味するが、この場合は既に存在した大和平野の条里地割（坪付）をそのまま使って計画範囲を指定したのではないか。つまり大仰な縄張り工事を伴わなかったと考えられる。中止もだから簡単であったろう。
- 注20 拙稿「天武の夢・平城京」古田会機関誌 202404。新城とは平城京のことと考えている。
- 注21 謝罪使・674 年 1 月には唐の高宗からは官爵を削られ、宿衛として留まっていた王弟の金仁問を新羅王に代えようとするとともに、劉仁軌らが新羅討伐に出兵することとなった。文武王は 675 年 2 月に謝罪使を派遣して一時的和平を現出した。ウイキペディア／文武王
- 注22 『書紀』天武紀下 天武十年二月条
- 注23 『書紀』持統紀 持統三年六月条。近江令とする説もある（岩波注）いずれにしろ、公布ではないと考える。
- 注24 『続日本紀』大宝元年八月条 「大略以浄御原宮朝廷為准正」とある
- 注25 直木孝次郎は前掲書 199 頁で「翌年二月二十七日、大海人皇子はここで盛大に即位の式を営み、皇位についた。天武天皇の治世が始まるのである。同時に日本の古代国家も、一年の昏迷ののち、ここに再び律令国家完成へのコースを、力強い足取りで進み始めるのである」と、天武王朝の始まりを高らかに描写するが、どこからそういう評価が出てくるのであろうか。
- 注26 朝廷内を一本にまとめるための錦の御旗を失ったのではないか。おそらく皇位を表す「草薙劍」が、皇親等によって運び出され、手元にはなかったと考えられる。「殿！御乱心」というところか。
- 注27 白村江の戦いに際して、留守司高坂王は倭王の半島遠征を見送って、倭京浄御原宮の殿舎管理や駅鈴や駅馬の管理を行っていたろう。進駐軍大和都督の支配下に入った後もその立場は変わらず認められていたと思われる。壬申の乱勃発時、高坂王が大海人皇子の駅鈴要請を断る。これは当然、大和都督が拒否していることを示している。それは、「大海人よ、どこへ行くんだ？」という疑心暗鬼ではないか。「余計なことは考えなくてよろしい。進駐軍の指示に従いなさい」、ということであろう。
- 注28 格好は軍事顧問団であったろうが、実態は大海人皇子の動静監視が目的であろう。

- 注 29 『書紀』の本線の戦いに関する記事は、進駐軍本隊に組み込まれた天武の將軍吹負軍だけにスポットが当たっている。天武は戦闘に加わらず、また終戦処理は息子高市皇子任せである。
- 注 30 近江京・近江大津宮は強制的に廃都となったと考えられる。羈縻支配下の政庁の位置としては管理上遠すぎたのであろう。近江朝廷の官僚機構はそっくり、浄御原宮内に移転してきたであろう。
- 注 31 進駐軍羈縻支配の対象は建前としては敗戦国倭国である。したがって、体裁としての倭国は存在しないと困る。実質はこれを代理した天皇王権を相手にしたのであろうが。その体裁が高宗の官僚としての倭王都督ではなかったか。その倭国が朱鳥元年に、改元していることは、倭王都督の崩御など、唐帝国が新たな都督の指名もできず、羈縻支配の対象国を名目的に喪失したことを示しているのかもしれない。
- 注 32 前掲拙著『実在した倭京』188 頁参照。大極殿の初出は天武十年二月条である。また、天武紀には殿舎建設記事が全くない。倭京浄御原宮殿・殿舎をそのまま使っていると想像される。天武には建設できるだけの資金も人的差配もできなかった可能性を想像させる。通説は、エビノコ郭大極殿説など記事出現の順番に建設していったとするのだが。
- 注 33 天武紀下 朱鳥元年七月条「戊午、改元曰朱鳥元年、朱鳥此云阿訶美苜利、仍名宮曰飛鳥浄御原宮」とある。
- 注 34 『万葉集一』岩波書店 1999 47 頁 「藤原宮の役民の作りし歌」左注に朱鳥七年、八年の記事がある
- 注 35 養老四 (720) 年に隼人の反乱がある。一年半で鎮圧されている。
- 注 36 大極殿院・朝堂院だけは格好がついている。しかし、発掘調査されている周りの官衙遺構群は貧弱であり、外周帯の機能を含めて未完成である。宮中軸線の位置が大規模水路跡であるなど朝廷の地盤沈下も認められ、全体としては恒久的な宮殿とは言い難いのではないか。
- 注 37 『旧唐書日本国伝』に「日本舊小国、併倭国之地」とあるが、日本国の使者がこのように正直に通報したそのままを記した可能性もあるだろう。倭国之地と言い、倭国そのものと言わないことに注意したい。
- 注 38 本郷和人『歴史学者という病』講談社現代新書2022第4章で歴史学の世界のサステナビリティを説く。結論を先送りする歴史学の世界を揶揄している。
- 注 39 倭国は5世紀以来の東アジアにおける軍事国家であり、覇権国家であった。倭国王を先頭に、勢いのあるときは問題にはならなかったが、倭国王が白村江の戦いに敗れて捕囚の身となった途端に、体制は一挙に崩壊したのではないか。国家体制に冗長度がなかった可能性がある。
- 注 40 『書紀』天智五年の最後の記事に「是冬、京都之鼠、向近江移。以百濟男女二千餘人、居于東國」とある。すでに、進駐軍は大和進駐を加速していたと思われる。難波・大和のネズミ (倭国留守官僚群) が近江からさらに東國に逃げるということであろうか。
- 注 41 『書紀』天武紀下 天武十二年二月条「壬戌、三位高坂王薨」とある。倭国官僚であった高坂王は大和の政治の中枢の中で無事没年を迎えたようである。
- 注 42 『書紀』などの神話によれば、饒速日尊も磐余彦尊 (神武) も九州からやってきたとする。

◆なお、引用した論文、書籍などの著者名は全て敬称を略させていただいた。謝してご寛恕を乞う。

【図・表出典】

- 図 1・中村修也『天智朝と東アジア』NHK 出版 2015 表紙を筆者コピー
- 図 2・拙著『実在した倭京・藤原京先行条坊の研究』ミネルヴァ書房 2021 表紙コピー
- 図 3・航空写真「天智の廟地／御廟野古墳」@googlemap に筆者加筆
- 図 4・『積日本紀』本文唐人条 国会図書館アーカイブス
- 図 5・『書紀』天武元年九月条 天武の無味乾燥な帰還記事
- 図 6・直木孝次郎『壬申乱』壬申の功臣記事 208 頁 筆者コピー
- 図 7・『書紀』天武五年 新城条
- 図 8・7世紀後半の年表 筆者作成